

うえまちだに 上町谷 1・2号窯の発見

大阪市教育委員会・(財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館

■ 今回の発見

大阪市教育委員会と(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所は、平成22年4月に中央区上町一丁目で発掘調査を実施し、古墳時代の須恵器窯を発見しました。現場調査終了後に出土資料を検討した結果、**初期須恵器**を生産するためにつくられた窯であることが判明しました。

窯は**窖窯**と呼ばれる形式のもので、東西に2基並んでおり、上町台地北部の平坦なところから南東に向かって下る「上町谷」に立地します。両窯とも、初期須恵器と呼ばれる5世紀前半頃の須恵器を生産したものと考えられます。今回発見された窯は「上町谷」に構築されたものですから、西の窯を「上町谷1号窯」、東の窯を「上町谷2号窯」と呼称することとします。

須恵器の生産は朝鮮半島からもたらされた古墳時代中期の最新技術のひとつで、畿内では大阪府堺市の**陶邑窯址群**を中心とする地域が、初期の段階から生産の拠点であったと考えられていました。ところが、近年、大阪府下では陶邑窯址群に加え、吹田市や枚方市で同時期の窯の存在が確認され、河内湖をとりまく地域でも初期須恵器の生産が行われたことがわかってきました。今回みつかった窯もその流れに連なる発見のひとつであり、須恵器生産の動きが、王権や諸豪族の動向と結びついたものであったことを考えさせる貴重な資料です。

古墳時代の上町台地北端部についてはこれまで、5世紀前半から中頃に建設された**法円坂倉庫群**などの発見により政治・経済の拠点が置かれたと考えられていました。今回の窯の発見により、近隣に法円坂倉庫群に先行する重要な施設が存在した可能性が出てきたといえます。

今回の調査によって、まだ不明な点の多い古墳時代の上町台地北端部の開発や土地利用のようすについて、貴重な資料を加えることができました。

■ 窯の構造

1・2号窯ともに、地下掘り込み式から半地下天井架構式に改修されたものと考えています。両窯とも、焼成部と燃焼部の一部を検出しました。

1号窯は斜距離での残存長3.70m、幅1.30mで、焼成部床面の傾斜角度は6度でした。天井や床、側壁の補修・改修の状況から、少なくとも3回以上の焼成が行われたことがわかります。

2号窯は斜距離での残存長3.80m、幅1.48mで、焼成部床面の傾斜角度は11度でした。窯の補修・

改修の状況から、5回以上の焼成が行われたことがわかります。

両窯で焼かれた初期須恵器は合計で105点(8.8kg)出土し、器形には高杯・壺・器台・**甗**・**甕**などがありました。このうち、点数、重量ともほとんどを甗が占めています。このほかにわずかですが**韓式系土器**が出土しており、平底鉢などがありました。

2基の窯跡で焼かれた製品はTK73型式頃に位置付けられ、5世紀前半のものと考えられます。

□ 用語解説

「上町谷」：

上町台地の北端は上面の平坦部の幅が1kmほどあり、その東西及び北面が急斜面となっていた。そこには、現在の地形から読み取るとはむずかしいが、降雨に侵食されてできたいくつもの谷筋が延びていた。そのひとつが「上町谷」で、これまでの発掘調査などにより、難波宮の想定宮域の南辺を南東方向に下っていたものと推定されている。

須恵器：

須恵器は、朝鮮半島から伝来した技術によって古墳時代中期に生産がはじまった焼き物である。日本窯業史上はじめて構築窯で焼成された焼き物であり、一般に青灰色を呈し硬質である。

形態が定型化する以前の段階の製品は特に初期須恵器と呼ばれ、土器型式ではTG232(・231)型式→ON231型式(=TK73型式古段階)→TK73型式新段階→TK216型式→ON46段階(TK208型式前半段階)が該当する。焼き物としての特性から、火にかけられない食器や貯蔵具の比率が多いが、初期須恵器ではその中で甗の割合が突出して多いことが特徴である。

窖窯：

須恵器は一般的に窖窯で焼成される。窖窯とは、焚口から排煙口まで隔壁などを有さない筒抜けの構造をもつものをいい、隔壁を持つ登窯と区別している。窖窯の窯体構造は、薪などの燃料を燃焼させる燃焼部、製品を窯詰めして焼く焼成部に大別でき、その後方にはさまざまな構造を有する排煙施設が伴う。また窯の構築方法から、以下の3種に分類できる。

■**地下掘り抜き式**：窯体を地下深く掘り抜いて窯体を構築する方法。少なくとも築窯当初は、ベース土をそのまま床・壁・天井として利用する。

■**半地下天井架構式**：窯体下部を溝状に掘りくぼめ、天井のみを骨組み材と貼土によって架構する方法。

■**地上窯体構築式**：窯体を築くための掘削が比較的浅く、窯体を盛土や骨組み材、貼土で作る方法。窯体は地上に出る。

法円坂倉庫群：

中央区大手前(現在の大阪歴史博物館がある場所)で発見された、5世紀前半から中頃にかけての倉庫群。16棟もの大型倉庫が方位に則って規則正しく配置されており、また床を支える柱とは別に2本の棟持柱を持つなど先進的な建築技術が採用されている。こうした建築技術・規模は古墳時代中期のものとしては群を抜いており、王権によって建設・運営されたものと考えられている。